



Title	マクス・ヴェーバーとシュテファン・ゲオルゲおよび ゲオルゲ・クライスとの関係
Author(s)	杉浦, 忠夫
Citation	明治大学教養論集, 473: 103-119
URL	http://hdl.handle.net/10291/14860
Rights	
Issue Date	2011-09-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

マクス・ヴェーバーとシュテファン・ゲオルゲ およびゲオルゲ・クライスとの関係

杉 浦 忠 夫

はじめに

1910年夏、マクス・ヴェーバーと詩人シュテファン・ゲオルゲは、ゲオルゲの高弟フリードリヒ・グンドルフの仲介で、ハイデルベルクのヴェーバー邸で初めて会見した。ヴェーバーとゲオルゲの交歓は、つねにヴェーバー夫人マリアンネとグンドルフの同席のもとで、ヴェーバー家で行われた¹⁾。しかし精神的世界の両巨匠の出合いは僅か2年しか続かずに終わった。ヴァイマルのゲーテとイエーナのシラーとの出会い(1794. 7. 20-23)は、周知のように経生変らぬ友情のもとに両詩人の詩作活動と人間的完成に創造的な役割を果たしたが、ヴェーバーとゲオルゲとの出会いが両者の爾後の創造活動に寄与することは殆どなかった。

「学問による世界の脱魔術化」と学問的「客観性」の追求に苦闘を重ねながら、同時にナショナリストとして、現実の政治活動に並々ならぬ関与を保ち続ける国民経済学者・社会学者と、カリスマ的指導者然として秘教的・男性結社的な詩作集団に君臨する詩人＝豫言者との違いは(両者には「広い範囲に亘って共通するところがあった」²⁾と言われるにせよ)、相互の理解と影響なり協力関係なりを成立させるには大き過ぎたと言うべきだろう。ヴェーバーとゲオルゲのそれぞれが相手の生き方や活動目的等に関して尊敬の念を失うことはなかったと、ヴェーバー夫人は亡夫の伝記でしきりに強調する³⁾

が、ゲオルゲの詩作やゲオルゲ・クライスの「精神運動」と「文化批判」が、1910年以降のヴェーバーの学問的成果に直接的な影響を与えたと見られる痕跡を見出すことは難しい。ゲオルゲの詩人＝豫言者の形姿とゲオルゲ・クライスのブント的主従関係の考察がヴェーバーの後年の主著『経済と社会』における「カリスマ的支配」と「ゼクテ」の論理形成を動機づけたであろうことや、ゲオルゲ派の若い俊秀たちの思想と行動へのヴェーバーの厳しい批判が『職業としての学問』を成立させる大きな契機であったであろうことは認めるにしても、ゲオルゲおよびゲオルゲ派一門のヴェーバーの学問形成への直接的影響は考え難い。

詩人ゲオルゲと卓抜な文学史家グンドルフがドイツ詩史やドイツ文芸学のなかでどのような意義をもつか、ヴェーバーのグンドルフに及ぼした大きな学問的影響——レペニースは一際強調する——がどれほどのものだったのか、第一次大戦敗戦直後に俄に浮上する「学問革命」にゲオルゲ一門の学的成果がどれほどの影響を与えたのか、マクスの弟アルフレート・ヴェーバーの「文化社会学」の形成にゲオルゲ・クライスの新進学徒たちがどれほど寄与したかなどなど、ヴェーバー兄弟をめぐるゲオルゲとゲオルゲ一門の考察は魅力ある課題を提供する⁹⁾。しかしわれわれのここでの課題は、「ゲオルゲ・クライスとの対決からの『職業としての学問』の誕生」と、「詩人ゲオルゲ批判からのカリスマ的支配の理論形成」を跡付けることにある。

1

ゲオルゲとの会談前と交際中のマクス・ヴェーバーのアンビヴァレントな感情の交錯については、常に同席して会話をともにしたヴェーバー夫人の伝記によって確認することができる。近親者の書いた伝記には、自伝におけると同様に、ある種の偏向なり作為なりの混入が、言うなれば「真実」に対して「詩」が紛れ込むことが避けられないだろうが、ゲオルゲに対応する亡夫

の伝記的記述には、可成りの客観性と信憑性を認めることができる。

マクス・ヴェーバーとシュテファン・ゲオルゲが1910年夏に初めて出会ったとき、かれらは全く未知の間柄ではなかった。この時点でヴェーバー（46歳）とゲオルゲ（42歳）は、それぞれの分野での第一人者として、それぞれがどれだけ相手を意識していたかは別として、その名は遍く知られていた。第二帝政成立前後から世紀の転換期を越えて第一次大戦にかけてのドイツの学問の国際的評価（Weltgeltung）の大きな一翼を担った古い大学都市ハイデルベルクの——古典時代のヴァイマル・イエーナを思わせるような——知的交流華かな雰囲気の中での二大巨匠の出会い、正しく一つの文化的事件であった。グンドルフは両者の出会いの一年前からヴェーバー家に親しく出入りしていた。かれはハイデルベルク大学入学以来、この町の歴史と文化的雰囲気に魅せられていた。グンドルフは全く異質の両巨人を引き合わせる役目を買って出たが、そこにはおそらくドイツ・ロマン派の残香漂う古い大学町ハイデルベルクに錦上花を添えたいとの心算があったに違いない⁹⁾。

ヴェーバーがゲオルゲに見えるまでに、かれがどの程度詩人ゲオルゲを知っていたかはマリアンネの伝記を通じてほぼ類推できる。ヴェーバーは、『第七輪』（1907）までのゲオルゲの詩集については、概ね通曉していたようだ。初期の詩集『讃歌』『巡礼行』『アルガバル』『牧童と賛美の詩の、伝説と歌と架空庭園の書』などは、フライブルク大学教授時代（1894年5月—1897年4月）に、哲学教授リッカートの強い懇懇に応じて通読した。しかしリッカートのゲオルゲ詩の推奨は効果なしだった。

「ヴェーバーは初期の詩集には全く聞く耳を持たなかった。かれはそれらのなかに自分とは全く関係するところのない技巧的な耽美主義を本質的に感じ取った」と、マリアンネは言っている。そしてその理由をかのかの女はこう述べる。「そもそも抒情的な、情緒連綿たる詩は、当時この質実な人間には合わなかったのだ」と述べて、ゲオルゲ拒否を当時のヴェーバーの地道な学究生活に帰している⁹⁾。しかし実際は、フライブルク大学教授就任講義が新任

の国民経済学者としての学術講演であるよりも、むしろナショナリストとしての政治綱領とも思える情熱的な政治志向の表明であったことを考えると、この時期に抒情詩を味到するだけの精神的余裕などは全くなかったというのが実状ではなかったろうか。

2

ところがフライブルク大学を辞任し、ハイデルベルク大学正教授に就任(1897年春)して、長い闘病生活を経えたあと事情は一変する。病氣療養中の「他に心を煩わさずにひたすら日光と花々の芳香に身をまかすことを学んだ」⁷⁾ 日々は、「それまでに閉鎖的であったかれの魂の部屋部屋を開かせ……芸術的形象を受け入れる感性を開花させた」⁸⁾、とマリアンネは言う。1909年以來、ヴェーバー夫妻の信任厚い話相手となったゲオルゲ派の新進学徒グンドルフは、ヴェーバーにゲオルゲ詩の味読を勧めた。『魂の年』『生の絨毯』『第七輪』のほか、グンドルフの慫慂に従い、ヴェーバーはリルケをも耽読し、読後の感動を妹宛ての手紙で綿々と書き綴り、こう書き添えた。

わたしはこの感情の世界が自分の気質に合ったものだと決して言うつもりはない。ただわたしはこの世界も兎に角知るに値するもので、実に様々のものが様々の時に独自の価値を展開しうるように思われる⁹⁾。

妹への手紙で詩的感性の世界に開眼したことを告白しつつ、他方同時に本来の自分の仕事はこの世界に埋没することではなく、別のところに、つまり客観的な学問の世界にあることを忘れないで欲しいと、続く文面で暗示する。ともあれ、ゲオルゲの詩が(詩人の存在形態は別として)ヴェーバーの関心を惹きつけ、かれを魅了したことは疑いない。ヴェーバーは1910年に、ゲオルゲと初会見する前の時期に、「ゲオルゲのような真の偉大さの相貌を持っ

た人物を論ずる場合には、容易なことでは議論にけりをつけることはできないだろう」と語って、ゲオルゲについて語れば語り尽せないほどの豊かな内容をゲオルゲの詩作品が湛えていることを称揚している¹⁰。この時期、ヴェーバーは、『魂の年』をとりわけ高く評価した。

芸術的なものもつこの力、すなわち、この作品で、また時としてそのほかの作品でもまた表明されているように、「我汝を放さず……」を再び見出すには、ヘルダーリンにまで引き返さねばならない。ゲオルゲがこれらの作品で、かつて語られなかったことを語るという感情によって、ダンテがその『新生』でやったと同じやり方に捉えられて、そもそも様式においてダンテ風の荘重なパトスの水準に滑り込んで行ったことが理解されるでしょう。あの強力な激情の煌きはかれのなかにも生きている、これは疑いないように思われます。往々にして理解不可能なほどに圧縮された簡潔きわまる表現を求めて詰め込んでゆく途方もない苦吟辛苦の詩作もまたそのためなのです¹¹。

ここには、並の社会学者だったら見逃してしまうのが普通であろうと思われるほどの、卓越した詩人の芸術創造の秘密を鋭敏に嗅ぎ取る芸術理解者を見ることが出来る。

3

詩人ゲオルゲに対するヴェーバーの畏敬と賛嘆に偽りはない。ヴェーバーのゲオルゲ詩の味読体験は、詩人の「魂の深奥の生」に共感して、その詩的形象を感じ取る豊かな感性を立証している。だがゲオルゲ門下生たちが宗匠ゲオルゲをカリスマ的な宗教的豫言者として賛仰し、一人の人間を全人間を支配する権威にまで高める、いわば「被造物の神化」、更に孤高を持する貴

族主義、大衆蔑視、技術と科学・資本主義と民主主義への憎悪、要するにゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスの「一切の近代的なるものへの呪詛」には強い拒絶反応を示した。所謂「マクシミン崇拜」を「全く不条理」¹²⁾と切り捨てたのもこれゆえであった。

ゲオルゲ・クライスのカリスマ崇拜と秘教的・男性結社のゼクテに見られる一切の反近代性をヴェーバーは激しく拒否したが、その基くところは、マリアンネのこぼを借りれば、「客体的文化の全体を洞察するラチオ（理性）」の「直観と形象の力をもって内面的な霊の世界」を創るゲオルゲ派の反近代性に対する反撥だった¹³⁾。更にかの女は、ゲオルゲの豫言者然たる性格に由来する自己神化に強い嫌悪を隠さなかった理由を、かれの持って生まれた厳格なプロテスタント的宗教性に求めた。

かれが母から受け継いだもの、つまり福音書への深い畏敬は、神的なものの地上的な具現のうちに人間存在の最高の意味を崇めるあの異教的な「宗教性」に反撥した。この宗教性にとっては、形成された美、すなわちギリシア人のカロカガディア (Kalokagathia) が人間の発展の最高の基準であった。しかし精神的・倫理的自律性の絶対的価値への信念に徹していたかれは、自分自身にも他の人々にも、個人的支配と個人的奉仕の新しい形式が命じられているということを否定した。いや、ひとつの大義、ある理想への奉仕と絶対的献身とはあるだろう、しかしたとえいかに卓越した畏敬すべきものであれ、地上の有限な人間へのそのようなものがあってはならない¹⁴⁾。

ゲオルゲ・クライスの気鋭の学徒ヴォルターズ (Friedrich Wolters) は、同門のザリーン (Edgar Salin) やヒルデブランドト (Kurt Hildebrandt) に同じく、ヴェーバーとゲオルゲおよびゲオルゲ・クライスとの対立関係を知るのに欠かせない重要人物のひとりだが、かれもまた、マリアンネ夫人同様、

ヴェーバーの生涯を律したプロテスタンチズムの要素を強調した。ヴォルタースは、「ゲオルゲが出会ったドイツ学者のうちでおそらく性格の純粋さではジンメルに、知的能力の明確さではディルタイに比肩できる人間的に最大の人物だった」と、ヴェーバーを称揚したあとこう続ける。

かれはプロテスタント的人間であった。禁欲的厳しさを有して、挑戦的人間の絶対的個別化を保ち続け、精気とか気質とかの理性的に解決できない魔術に屈服することより以上のことは恐れることなく、むしろそれゆえにすべてを認識する悟性によってすべての人間的所産の完全な脱魔術化を擁護したプロテスタント的人間、今日の人々のための結合の可能性を認めるだけよりも、むしろ好んで自分の責任で愚者で革命家であろうとしたプロテスト的人間、かれはそういうプロテスタント的人間のひとりであった¹⁵⁾。

ラチオナールな学問的客観性と学問による「世界の脱魔術化」を標榜する立場が、直観的・創造的な詩作に生きる立場と氷炭相容れないように、禁欲的プロテスタンチズム的基本姿勢がカリスマ的預言者風詩人とその信奉するゲオルゲ・クライスの思想・行動を峻拒したのは当然である。結局、1912年6月を最後にヴェーバーとゲオルゲの会談は終り、その後に両者が相見える機会は絶ち切れた。「それぞれが相手のなかに自分と最もかけ離れた資質が完全に具現されているのを認めた」(ザリーン¹⁶⁾) ことと、「第一次大戦についての解釈の相違」(マリアンネ夫人¹⁷⁾) とが決定的であったのだ。

4

ザリーンとヒルデブラントの伝えるところに依れば、ゲオルゲはヴェーバーの学問の重要概念である「客観性」(Objektivität) を「みすばらしいハイ

デルベルクの案山子」(armseliger Heidelberger Popanz)だと一蹴したという¹⁸⁾。ゲオルゲは「わたしからはいかなる道も学問には通じない」¹⁹⁾、と言ったそうだし、「ゲオルゲは学問については余りにも少ししか知見をもたなかったし、そのうえ学問への好みとなると一層乏しかった」²⁰⁾ そうだ。ジンメルはゲオルゲ論についてゲオルゲはこう言ったという。「わたしはこの論文を一行たりと理解しない」²¹⁾。ゲオルゲとゲオルゲ・クライスが、ジャーナリズムとともに学問・科学を嫌悪したことはよく知られている。ヒルデブラントは『シュテファン・ゲオルゲとゲオルゲ・クライスの思い出』のなかでこう言った。

「(ゲオルゲ・クライスの)すべてのメンバーは、創造的な生こそが本質的なものであり、それに対して学問とジャーナリズムは、ただの道具でしかないという点で意見が一致していた」²²⁾。

既成の学問を含め、新興の学問である社会学(ゾンバルト、ジンメル、テニエス、そしてヴェーバー兄弟によって代表される)に対するゲオルゲ派学徒たちの反感と嫌悪は確かに強かったが、それにもかかわらずマクス・ヴェーバーの人と学問に対するゲオルゲ・クライスの批判となると、アンビヴァレントな評価が見られるのは避け難い。ゲオルゲ・サークルに属する新進学徒たちの多くはヴェーバーの日曜例会に参加して、直接ヴェーバーの警咳に接したこともあってか、かれの学問に賭ける真摯で情熱的な姿勢には誰しも一様に畏敬の念を抱いたことは、かれらが書き残した記録から容易に読み取れる。しかしかれらのマイスター・ゲオルゲとの人間的比較とヴェーバーの学問的成果に関しては、かなりイロニーの混じった評価に満ちていることに気付く。とりわけグンドルフを除くザリーン、ヒルデブラントたち(かれらはマクスに学ぶよりは弟アルフレートに師事した)のヴェーバー批判は、かれらの志向する「新しい学問」の形成とヴェーバーを乗り越えようとする意志

の表われであろう²³⁾。

ゲオルゲとヴェーバーが初めて出会った1910年は、ヴェーバー夫人の言い方に従えば、ゲオルゲが「耽美の僧院を出て……この世界を革新し支配することを要求し、告知した」年であり²⁴⁾、同時にゲオルゲ・クライスが「精神運動のための年鑑」の発刊によって、新しい文化形成力たらんと出発した年であった。この年を境にゲオルゲ・クライスと新興の社会学陣営が世界の解釈と時代診断をめぐる、合理的な学問と直観的・芸術的な文化批判という互いに鏝迫り合いを演じつつ、死せる知識の累積に過ぎぬ古い、言う所のアレクサンドリアの学問の克服を目指した。ゲオルゲ・クライスの若者たちが、ヴェーバーやジンメルによって代表される新興学問の歴史的文化科学に対して挑戦したように、ヴェーバーは自宅に集まる議論相手（グンドルフは別にして）に対して自己の学問の正当性を客観的に明確化するための対決を強いられることになった。

5

ゲオルゲ・サークルに属するヴェーバー批判者のうち、とりわけその急先鋒はザリーンであった。ザリーンはグンドルフに劣らず、ヴェーバー家の月曜例会の常連であり²⁵⁾、国民経済学専攻の俊英であった。かれのヴェーバー批判、ヴェーバーとの対決は、全く対立する異質の学者と詩人を対比することから始まる。ザリーンはヴェーバーをあちら側、ゲオルゲをこちら側と設定して両者の比較を試みる。

あちらにはこの時代の最大限の理想像が実現されていた。あらゆる種類の断崖と稜線をもち、あらゆる才能と知識を有し、高貴な情熱と感動的な厳しい責任感をもつ人物がいた。しかしあそこには喜びもなく幸福もなかった。……こちらには尊師（マイスター）がいた。つねに自足し

て、息子たちにとってつねに故郷であり、悠然としていると同時に緊張があり、最も奥深いゲーテ的意味での個性の人物であった。……尊師の目の前では、あちら側のすべての「問題」は崩壊して無に帰してしまっただ。——こちらには分析し分解する批判はなかった。こちらには人生と愛の魔術が息づき、この魔力の前では世界の「脱魔術化」を自己の学問的課題とみなすあの孤独な男の苦悩は雲散霧消した。こちらには死せる「客観性」の代わりに、生き生きとした公正さが支配していた。われわれの若々しく鋭利な世俗拒否を今なお制止するとともに、盲目的な弾劾に対する警告板として「われらの時代の賞賛」が年長の友人たちに向けられたことを時代の若い否定者たちに思い出させることができる公正さが支配していた。……

イロニーッシュな当て擦りや中傷を飛び越えて、悪意ある挑戦とも受け取られるザリーンの評言は、ヴェーバーの学風に「悲劇的なもの」を見ることで締め括る。

この偉大な尊敬すべき学者がいかに巨大な力をこめてかれの「客観性」妄想の「概念的明確化」と「歴史的保証」を求めて努力したか、そこには正しく悲劇的なもの (etwas echt Tragisches) があった²⁶⁾。

ザリーンの立論が、マクス・ヴェーバーとの対決を通じて、ゲオルゲ・クライスの学問論の正当性を主張しようとするところにあることは、ゲオルゲとの意識的な対比の上で取り上げたヴェーバーの用語の毒気を含んだ適用にある。師匠ゲオルゲの称揚とゲオルゲ・クライスの自己理解のために用いられた「最も深遠なゲーテ的意味での個性の人物」「愛する心」「人生と愛の魔術」「生き生きとした公正さ」などの語に対して、ヴェーバーに向けられた文言は、「感動的な厳しい責任感」「喜びもなく幸福もない」「分析的・分解

的な批判」「世界の脱魔術化」「死せる客観性」など、ヴェーバーの学風を歪め風刺する語彙を撒き散らす文言に見られるザリーンの挑戦的な Anti-Weber の姿勢は否定すべくもない。

6

マリアンネ夫人の伝記的記述によれば、1910年秋、ヴェーバーは「南ドイツ月報」誌に掲載されたルードルフ・ボルヒャルト（「伝記」では R. B. とだけしか記されていない）のゲオルゲ・クライスに対する論難文に対して、学問的な根拠からゲオルゲとゲオルゲ派を公然と弁護したことがあった²⁷⁾。ボルヒャルトはゲオルゲ門下生の客観的な論証性の欠如、好みに合わない真実のタブー視、学問的に無責任な独断論を槍玉に挙げたのだ²⁸⁾。

ヴェーバーは、本音はボルヒャルトの見解に同調的であった。しかしヴェーバーは、ゲオルゲとその門弟たちがヴェーバー自身とは「究極的に別の神に仕えている」学敵であることを十分知り抜いていたにもかかわらず、あえてゲオルゲ自身の「その使命に立ち向う態度の飾り気のない本当の真摯さと一門の芸術と意欲の高さに肯定を与えざるをえないという事情」²⁹⁾から、かれらの弁明を買って出たのだった。

ヴェーバーの騎士道的対応ぶりに対してゲオルゲ一門がどのような反応を示したのかは残念ながら知らないが、ゲオルゲ・クライスの若手学徒たちがボルヒャルトの論難にどう反論を加えたのか、ヴェーバーの好意ある援護射撃に表敬したのかどうかもわからない。確かなことは、いずれにせよ、かれらにとってヴェーバーの「客観性」と「世界の脱魔術化」が克服・否定さるべき「古い学問」であったことに変わりはない。

「父親に対する息子の反逆」は、世紀の転換期以降、益々多方面に広がりを見せていた。学生の大学改革運動や各種青年運動の高まりに呼応するように、若手アカデミカーが大人世代の学問や芸術に矛先を向けたのも不思議は

ない³⁰⁾。その多くが1880年の生れであるゲオルゲ一門の若手学徒たちが、1860年代生れのヴェーバーを乗り越えるべき学敵と考えたのも当然だったかもしれない。産業化の進展に必然的に伴う学問の役割と機能の転換にいち早く着目して古い学問研究体制に決別したヴェーバーでさえ、(その人間性への敬意は別としても)その学問は若い世代からすれば、克服さるべき対象たらざるをえなかったのだ。前述のザリーンの毒気を孕んだヴェーバー評は、その意味でヴェーバーの学問全体に対する挑戦意欲の表われであったろう。

マクス・ヴェーバーの弟アルフレートは、こうしたゲオルゲ派一門の挑戦的姿勢に疑問を呈した。アルフレートは、1906年以来ハイデルベルク大学で教授として、文化社会学を講じていた。その期間を通じて、アルフレートは身边に多くのゲオルゲ派の俊英たちを集めた。これらの若い学徒との交歓を回想しながら、晩年の回顧録のなかでこう書いている。

私はこの男(ゲオルゲ)の名声に従う、内面的に非常に豊かで、また才能ある若者たちと親しく交際した。……しかし私はこの名声なるものを胡散臭いと感じた。この男は、デモクラシー時代の到来の明白な必然性に反対して、「マイスター」に対してだけではなく、自分の結社に対するロマンチックな英雄崇拜をも要求するという点で胡散臭かった。そしてこの英雄たるや、秘儀を授けられた者たちの自己演出と「選び抜かれた集団」のまぎれもないスノビズムを処生に便利な核心として含むものだった³¹⁾。

兄マクスが自己の学問を合理的な思惟による行為として理解したが、それに対し弟のアルフレートは、学問を創造的・芸術的な行為として捉えて、直観的・独創力としての芸術こそが学問に豊かな刺戟を与えると考えた。アルフレートの文化社会学がゲオルゲ・クライスの若手学者たちとの学問的交歓から形成されたことは間違いない。アルフレートは遥か後年になってから

前述のようにかれらとの交際を回顧して、かれらの「ロマンチックな英雄崇拜」とエリート集団としての「スノビズム」を指摘したが、実はマクスは1910年の時点でかれらの上述の生態を知悉していたのだ。1917年秋の講演『職業としての学問』において、マクス・ヴェーバーは学者の職業倫理を話題にしたが、この講演がゲオルゲ・クライスの若手学者たちの姿勢に対する手厳しい批判を出発点としていることを忘れてはなるまい。1917年5月と9月のラウエンシュタイン文化会議での学生・青年運動家たちへの警告よりも、ゲオルゲ・クライスの文化批判とその学問的姿勢とに対する批判的な対決が『職業としての学問』の成立を基礎づけているのである。

7

『職業としての学問』におけるヴェーバーのゲオルゲ派との決別と対決を最もよく表わす文言のひとつを、本講演の終りに近い部分に見出すことができる。

学問はこんにち専門的に営まれる「職業」として諸種の事実的関係を自覚し認識することを役目とします。従って学問はもはや救いや啓示をもたらす視霊者や豫言者の贈り物や世界の意味に関する賢者や哲学者の瞑想の産物ではありません³²⁾。

ヴェーバーがここで言う「視霊者・預言者」,「賢者・哲学者」が門弟たちに自らを“Seher”と呼ばせたゲオルゲ自身を指していることは明らかだ。また、講演文中に繰返し出てくる「若者たち」(die Jugend)が、これまたゲオルゲ派一門の若手学者たちを指していることは、かれらの用語や主張の頻用でもって明らかである。例えばこうだ。

こんにち若者たちのあいだで一種の偶像崇拜の考え方が大いに普及して、街頭でも、またどのような雑誌でも広く見出されます。偶像というのは「個性」(Persönlichkeit)と「体験」(Erleben)のことで、両者ともに密接に結び付いております。体験が個性を作り、そして個性に属するとの考えが支配しているのです。「体験する」ことに苦勞するわけです。——なぜならこれが個性ある人物の身分に適わしい生き方だからです。それがうまく行かないと、少くともこの天与の賜物を持っているかのような行動をとらざるをえないのです。以前ならこの「体験」はドイツ語で「センセーション」と呼ばれました。「個性」が何であり、何を意味しているかについては、もっと適切な言い回しがあったはずだと思います³³⁾。

プラトン『国家』第7篇中の有名な「洞窟の比喩」を持ち出したあと、ヴェーバーは若者たちの学問についての考え方は、「しなびた手でもって現実生活の血と汗を捉えようと認めながら捉えられない人為的な抽象物から成る影の国のようなものだ」³⁴⁾と厳しく決めつける。

更に続けてヴェーバーは今日の若者の、「独自の自然と従って自然そのものに回帰するための主知主義からの解放」、「主知主は最悪の悪魔だ」とする主知主義憎悪³⁵⁾、「教師ではなく、指導者」への安直な期待³⁶⁾などなどを聴講者の前に被露する。

『職業としての学問』は、第一次大戦末期からヴァイマル共和国成立に至る間の揺れ動く時代認識と危機意識を濃厚に反映させながら、変革期における大学の在り方(大学制度や教員の人事問題や学問と人生、学問と教養の統一などなど)を、ヴェーバーが自己の大学人としての存在を賭けて学生の前に提示したという大方の定説に間違いはない。だがヴェーバーが焦眉の急として取り上げた「講壇の預言者」と「指導者」待望論の浮上に対する警告がこの講演の最重点課題であったと捉えるなら、ゲオルゲおよびゲオルゲ・ク

ライスに対する批判が痛烈な皮肉と毒舌に彩られていたことに納得がいくはずだ。預言者・指導者待望論形成者としてのゲオルゲ・クライスへのヴェーバーの怒りと批判の厳しさは、例えば次のような言い回しに見られる。

「知性の犠牲」を捧げるのが正当だとみなされるのは、弟子が預言者に、信徒が教会に対してのみであります。相当数の現代の知識人は、自分の心をいわば確かに正真正銘の古い道具でもって飾り立てようという欲求をもちかかえ、そして同時に宗教もまたその通りなのだということを出しますが、これによって新しい一つの預言が誕生したためしはありません。なにしろかれらは宗教を持っていませんし、宗教のために遊び半分に世界中から寄せ集めた聖人像を飾りつけて、一種の家庭内礼拝堂を代用品として備えついたり、あるいは多種多様な体験の代用品として創り出します。そしてかれらは、これらの体験に神秘的な聖像を所有しているのだという威信を付与して、これを書籍市場で売りさばくのです。これは正に詐欺か、でなければ自己欺瞞です³⁷⁾。

(つづく)

《註》

- 1) この会見の様子とその後の両者の交渉経過、その間のヴェーバーの動静などの詳細はすべてマリアンネ夫人の伝記に負う。Marianne Weber: Max Weber. Ein Lebensbild. Heidelberg 1950, 2. Aufl. 13. Kap. Das schöne Leben, S. 457-486. (マリアンネ・ウェーバー『マックス・ウェーバー』大久保和郎訳、東京1963年、新装第2刷、第13章「美しい生活」339-362頁)。序でながら章題の「美しい生活」は、ゲオルゲ詩集『生の絨毯』前奏曲の第11・12行の „Das schöne leben sendet mich an dich/Als boten...“ に由来する。Stefan George Werke in 2 Bdn. 2. Aufl. 1968, Bd. 1, S. 172.
- 2) Marianne, S. 469 (348頁).
- 3) ebd., S. 468, 470f (347・349・350頁).
- 4) グンドルフに与えたヴェーバーの強い影響については次下を参照。Wolf

Lepenies: Die drei Kulturen, Soziologie zwischen Literatur und Wissenschaft, München 1985; S. 339-355 (ヴォルフ・レペニース『三つの文化』東京, 2002年, 362-383頁)。ゲオルゲ・クライスと「学問の革命」, アルフレート・ヴェーバーの「文化社会学」へのゲオルゲ・クライスの関与については以下を参照。Bernhardt Böschenstein u. a. (Hrsg.): Wissenschaftler im George-Kreis, Berlin, NY. 2005. とくに Volker Kruse: Die Heidelberger Soziologie und Stefan George-Kreis, S. 259-276.

- 5) ゲンドルフはハイデルベルク大学入学以来, ドイツ・ロマン派の匂いの染み付いたこの大学町に愛着を持ち続けた。妻帯のため師のゲオルゲから破門されても, ベルリン大学教授の招聘をも振り切ってまでも, 1931年51歳で癌で亡くなるまでハイデルベルクに留まった。ハイデルベルク大学の最も有名な教授たちの一人として, かれの功績は, 創立600周年記念論集 „Semper Apertus“ (in 6 Bdn. Bd. III. 1985, S. 259-283) に記録されている。またかれの生誕100年・没後50年記念特集号として刊行された „Euphorion“ 75. Bd. 1981と時期を同じくして同大学刊行の“Heidelberger Jahrbücher” と „Ruperto Carola” もゲンドルフに関する論文を数篇掲載している。
- 6) Marianne, S. 463 (343頁)。
- 7) ebd., S. 461 (342頁)。
- 8) ebd., S. 463 (343頁)。
- 9) ebd., S. 463 (344頁)。
- 10) ebd., S. 445 (345頁)。
- 11) ebd., S. 465 (345-46頁)。
- 12) ebd., S. 466 (346頁)。
- 13) ebd., S. 468 (348頁)。
- 14) ebd., S. 465 (345頁)。
- 15) Friedrich Wolters: Stefan George und die Blätter für die Kunst. Deutsche Geistesgeschichte seit 1890, Berlin 1930, S. 471.
- 16) Edgar Salin: Um Stefan George. Erinnerung und Zeugnis, Godesberg 1954 (2. Aufl.) S. 107.
- 17) Marianne, S. 471 (350頁)。
- 18) Salin, S. 254.
- 19) ebd., S. 249.
- 20) zit. b. Edith Weiller: Max Weber und die literarische Moderne. Ambivalente Begegnungen zweier Kulturen, Stuttgart, Weimar 1994, S. 71.
- 21) ebd., S. 71.
- 22) Kurt Hildebrandt: Erinnerungen an Stefan George und seinen Kreis, Bonn 1965, zit. b. Volker Kruse: Heidelberger Soziologie und der Stefan George-

- Kreis, in: Wissenschaftler im George-Kreis, S. 259-276. とくに S. 260.
- 23) アルフレート・ヴェーバー家の例会に参加した常連は以下の通り。Edgar Salin, Arthur Salz, Wolfgang Heyer, Norbert v. Helingrath, E. R. Curtius, Friedrich Sieberg, Werner Picht, Erich v. Kahler. Kruse, S. 261.
- 24) Marianne, S. 466 (346 頁).
- 25) エドガー・ザリーンは、1970年にヴェーバー研究家安藤英治とのインタビューでこう語る。「わたくしは定期的にマクス・ヴェーバーの日曜例会にわたくしの友人たち(W.ハイヤーとヘリングラートのこと)と一緒に出席しました」。Kölner Zeitschrift für Soziologie und Sozialpsychologie, 55 (2003, S. 596-610), S. 600.
- 26) Salin, S. 108-110.
- 27) Marianne, S. 467 (346-47 頁).
- 28) vgl., Weiller, S. 70f.
- 29) Marianne, S. 467 (347 頁).
- 30) 世紀転換期からヴァイマル時代に至る学生の大学改革運動・各種青年運動とドイツの大学・学問との関連については、好個の基本書として次の三著が挙げられる。
Konrad H. Jarausch: Deutsche Studenten 1800-1970, Frankfurt/M 1984;
Walter Laqueur: Die deutsche Jugendbewegung. Eine historische Studie, Köln 1978; Sigrid Bias-Engels: Zwischen Wandervogel und Wissenschaft. Zur Geschichte von Jugendbewegung und Studenschaft, Köln 1896.
- 31) zit. b. Kruse, S. 268.
- 32) Max Weber Gesamtausgabe (hrsg. V. Horst Baier u. a.) Tübingen 1992. Abt. I. Bd. 17, S. 105 (尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波クラシックス, 1982年, 65・66 頁).
- 33) Weber, S. 84 (27 頁).
- 34) ebd., S. 88f (36 頁).
- 35) ebd., S. 91 (39・40 頁).
- 36) ebd., S. 95-97 (45-47 頁).
- 37) ebd., S. 108f (70・71 頁).

(すぎうら・ただお 名誉教授)